
鈴懸（すずかけ）の枝

石山ウルマ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すずかけ
鈴懸の枝

【Nコード】

N5155P

【作者名】

石山ウルマ。

【あらすじ】

二月の札幌の夜、書き終えたばかりの手紙を投函しようとポストへ向った。

前編（前書き）

大人の童話として書いた作品です。

前編

二月の札幌の夜、書き終えたばかりの手紙を投函しようとポストへ向った。

吹雪の夜だったが、書き終えたらたまらなく投函したい手紙だった。

暗い夜道に加えて横殴りの雪が吹きすさみ、正面を向いて歩くのが難儀だった。

投函を終えての帰り道に、どこかで道を一本曲がり損ねた。

目の前に赤い提灯が突然と現れて、道を間違えたことに気付いた。

それは路地裏などによく有る、焼き鳥屋の提灯だった。

興味を引かれたのはその焼き鳥屋の名前だった。

『鈴懸の枝』

なんて読むのかわからない。

普通の焼き鳥屋の名前は『とりー』だったり『鶏処』だったり、とても分かり易い。

悩んでいると、染みつ垂れた縄のれんを払いのけて、店から帰る男が一人出て来た。

酔って赤くなった顔と一瞬目と目が合ったが、その男はするりと顔をそらして吹雪の中に消えて行った。

腕時計を見ると午後8時を少し回ったところ、アパートに戻っても特にやるべきことはない。お店の名前も気になるし、たまにはこんなお店に入ってみるのも良いかなと思った。

間口の狭い引き戸を開けて店内に入ろうとするなり

「なんだ、今日はもう店じまいをしようと思ったのに」

どてら姿の三十代半ばの女にそう言われた。

「はっ？はあ、それはどうもすみません」

そう謝って帰りかけたら

「良いから入んなよ」

「でも・・・」

「風が入るから、ぐずぐずしないで早く入ってよ」

何で俺が叱られるのだ、腹が立ちそうでした。寂しかったのかもしれない。

その女は「ここに座りなよ」とカウンター前の丸椅子を指差した。

どうも姐御肌の女らしい、ものの言い方からそんな想像をした。

カウンター前に丸椅子が五脚、二人掛けのテーブルが二つ、どこにでもある小さな

焼き鳥屋だ。

壁に貼られた短冊のお品書きも、薄茶色の縞模様が浮かんでいてこの店の年季を感じさせた。但し、この店が不潔と言うわけではない。むしろカウンターも割箸立ても綺麗に磨かれている。

焼き鳥を数本と熱燗を一本注文した。

すると今度は

「あんた、本当に大人なんだろうね」

「はあ!？」

今度は本当に腹が立った。確かに俺は童顔かもしれないが、その言い方があまりにも失礼な感じで、むかつとした。

「俺は23歳だよ、なんなら免許証を見せようか」

女は俺の剣幕に少したじろいだ様子だった。

「分かったわ、免許証なんていらないわよ。そんなに怒らないでよ」

「怒るというより気分が悪い」

「そりゃそうだね、気分悪いわよね。ごめんなさいね」

そんな素直なところもあるのかと思ったら

「でもね、子ども扱いされても怒らないのが本当の大人よ」

と、まるで勝ち誇ったように言い返してきた。

こんな女と口げんかする気はさらさらない、が、つい言い返してしまった。

「違いますよ、怒るべきときに怒るのが大人ですよ」
女は笑って「理屈っぽい人ね」と言った。

ちよつとした後悔があつた。あのまま吹雪の中を真つ直ぐに帰れば良かったと思つた。

どこかに、ささやかな理不尽さが止めどなく渦巻いているようで不快を感じていた。

女はすでに焼き鳥を焼き始め、徳利を暖め始めている。もう遅い、そんな風景が虚しく見えた。

「ねえ、見かけない人だけれど、どこに住んでいるの」

「北区です」

「ここもそうよ」

「四十条です」

「ここもそうよ」

「三丁目です」

「馬鹿ね、初めっから、そう言えば良いのに」

どうして俺は捻^{ひね}くれてしまったのか、俺は金輪際、何を訊かれてもこの女には答えたくない気分になつた。

「ねえ、いつから三丁目に住んでいるの」
無視した。

女は束の間の時間を置いて

「あら、私ってさつそく嫌われたのかしら」

カウンターに頬杖を付いてそ知らぬ顔を決め込もうと思つたが、耐えられなかった。

「去年の10月です」

女の耳には届いているはずの声だったが無視されように、何の反応

もなかった。

間もなく女は熱爛徳利とお猪口を俺の目の前に置き、背を向けた。この女はこの女で、俺を招き入れたことを後悔しているのだろうか。けれどもすぐに向き直り、気を取り直したかのようにお猪口に酒を注いでくれた。

「学生でもなさそうだし、仕事でここに来たの？」

「いや、それがなんと言って良いのか、旅の途中みたいなので・・」

「変な人ね、で、出発地点はどこなのかしら」

「神奈川県です」

女は感慨深そうに小さく息を吐いて

「へえ、あんた神奈川県なの。懐かしいな、私は以前に川崎市に住んでいたんだよ」

「俺はその川崎市の生まれですよ」

そう言うとな女はおれの顔をまじまじと覗き込んで

「ありやりや、それ本当？へえ驚いた。私は幸区よ、あんたはどこ？」

「同じです、幸区です」

元々大きな瞳の女だったが、ことさら目を開いて驚きの顔を見せた。

「初めっから『幸区』って言えば良かったですか？また、『馬鹿ね』って言われそうですね」

「あはは、あんたは根性が曲がっているね」

女はそう言っただけを睨みながらも、けらけらと大らかに笑っていた。

「ねえ、そう言えばあんたさっき、免許証を見せるって言ったわよね。見せてよ」

俺は女に免許証を差し出した。

免許証に記載された住所を確認したいらしい。

「どうですか？ウソは何もないでしょう」

「うん、それは信じる。でもね、もっと驚いたよ」

「何がですか？」

「私とあんたは誕生日が同じなんだよ」

熱燗の酒を飲んで、焼き上がったばかりの焼き鳥に噛り付いた。
俄かにほんのりと身体が暖まってゆき、心地よかった。

「あんたの干支は午^{うま}なんだ。私と一回り歳は違うけれど干支まで同じなんだ。なんだか気持ち悪くなるね」
女はまだ俺の免許証を手放さなかった。

「石山剛か、名前は平凡だなあ。顔は童顔だし、背はちっこいし。まあ、ブ男ではないけれどね」

俺は茫洋と耳を傾けた。お酒のお陰か何を言われても、すでに怒る気にはなれなかった。

どこかで親しみをこの女に抱き始めていたのだろうか。
店の外は相変わらずの吹雪模様で、時折入口のガラス戸がガタガタと音をたてている。それに比べてこの店内には、飛び交う言葉とはあべこべに、穏やかな時間が流れていることを感じた。

「ねえ、お姉さんの名前を聞いても良いかな」

お猪口の酒を飲み干して聞いてみた。

「私の名前を聞いてどうするのよ」

機嫌を損ねたのだろうか、何となく冷たい返事だった。

「どうするも何も、名前で呼びたいからですよ」

やがて女は何かを考え、何かを整理したかのように首を縦に振ると

「私の名前は『鈴^{すず}』、鈴木さんの鈴よ。漢字一文字よ」

「あゝ、あの金への鈴ですね」

「この名前、どう思う？」と俺の顔を見つめた。

「そう急に言われても、別に何もありませんけど。何か考えましょうか？」

鈴さんは「無粋なヤツだわね」と露骨に嫌な顔を見せたが、そんな表情とは裏腹に

「これからオジヤを作るから一緒に食べよう」と誘ってくれた。

どうせ腹ペコなんでしょう、お酒と焼き鳥だけじゃいい若い男の身が持たないでしょう、と言いながらも、その動きはカウンターを越えて入口に向った。何をするのかと見ていたら、赤提灯の電灯を消し、暖簾を店内に片付けてしまった。引き戸の錠を内側から締めようと鍵棒を回し始めた時に、鈴さんの動きがためらいがちに止まった。

何かをためらった鈴さんの手は、逆回転をして鍵棒を元の位置まで戻した。

俺は漠然とその手を見つめていた。

鍵棒を逆回転させる指先に、何とも危なげな鈴さんの脆さと気丈さを感じた。

後編

カウンター内に戻った鈴さんは手鍋に水を入れ、手際よく刻んだ椎茸や蒲鉾かまぼこなどを入れてオジヤを作り始めた。

「ねえ、鈴さん。ひとつ質問が有るんですけど、聞いても良いですか？ たいした質問じゃないんですけど」

「回りくどいわね、何を聞きたいの」

聞くならさつさと聞けと言わんばかりだった。

「ここの店の名前は何と読むんですか？」

鈴さんは包丁の動きを止めて

「ふふふ、それが。今日は私も少し飲もうかな」

質問には答えずにコップにお酒をついで、ゆっくり一口飲んだ。

「あんたも、もう少し飲めば。面倒だからお燗はしないよ、その代り只で良いから」

返事をする前に冷酒をコップに注いでいる。

そんな仕種には、繊細な一面と豪放磊落じふほうらいらくな一面とを相次いで垣間見せられたような感じがした。

「この店の名前は『すずかけのえだ』って読むのよ。鈴懸すずかけはポプラの事よ。」

北海道では並木に良く植えられる木よ。だから鈴懸の枝はポプラの枝という事よ」

「ふん。それで、何時いつ、誰がどんな意味で付けたんでしょうか」

「あんたはまるでルポライターだね」

どうやらぶっきらぼうな語り口は鈴さんの癖のようだ、怒ったように聞こえるのはそんな言い方が災いしている。現に今も笑みを含んでいる。

「鈴さん、俺の事をあんたじゃなくて石山って呼んで下さいよ」

「別に、あんたはあんたで良いじゃないの」

「でも、このお店だつて『鈴懸の枝』って、ちゃんと呼ばれたいでしよう？俺だつて同じです」

「本当に理屈っぽいね。あんたはあんたで良いのよ」

俺はそれ以上の抵抗はしなかった。

「それで、名前の意味はなんですか？」

鈴さんはまた一口お酒を飲んで、何故か俺を睨みつけた。

「この店の名前は父が付けたんだよ」

「それで」

「あんた、ちゃんとお仕舞いまで聞く気あるの」

また睨まれた。

「もちろん」

鈴さんはまた一口お酒を飲んで咳払いをして話し出した。

「私が生まれた時に、大工だった父はお祝いに拳こぶしくらいの大きさの鈴を買って来て、鈴懸の枝にその鈴を針金で括くり付けたんだよ。

よほど嬉しかったらしくて酔って木に上って、天辺の枝に括り付けたんだよ。大工だから高い所は平気だったみたい。それで私の名前も鈴になった。ところがね、何処どこの鈴懸の木に付けたか忘れちゃったのよ。酔って木に登る事は出来たし、鈴もすっかりと針金で括り付けたのに、肝心の付けた場所を忘れちゃったんだよ。母はそんな事は気にしないで良いよと言ったらしいけどね。それでも時々父は、どこかの鈴懸の枝に鈴が付いているはずだと随分と探したらしい。でも見付からなかった。でね、私が大人になって家出同然に北海道を出ちゃった時に、父は母にこう言っただよ『俺があの時に鈴を見失わなければな』って。馬鹿だよ、関係ないのにね。その後父は現場の高い所から落ちて大工の仕事が出来なくなつてこの店を始めたのよ。『いつか鈴が戻ってくるように』ってね。だ

から『鈴懸の枝』なんだって。私はそんな事知らなかったからね、私が店の名の由来を知ったのは、父が重病と知らされてからだったでね、父が亡くなってからこの店を私が継いでやっているのよ。そろそろ四年目になる。あんた分かった？これでお仕舞い」

言い終えた鈴さんはまたお酒を飲んだ。

「あんたも、旅の途中なんて呑気な事を言っていないで、両親に親不孝を掛けちゃ駄目だよ」

そう言うのと鈴さんはオジャ作りに専念し無言のひと時が流れた。

俺は鈴さんの父親が残したものであろうか、お品書きの短冊や目の前のカウンターを見ると胸が熱くなった。俺は親不孝者か、それは間違いない。

店を継いだ鈴さんは親不孝者か、それは俺には分からなかった。

鈴さんは出来上がったオジャをお椀に取り分けてくれて、二人掛けの小さなテーブルでオジャを食べた。

「鈴さん、もう一杯お酒を頂けませんか。冷で良いです、お金もちゃんと払います」

「みみっちい男だな」

そう笑ってお酒を取りに席を立つてくれた。

「よし、今夜は飲もうね。あんたも付き合いなよ」

オジャを食べながらお酒を飲んだ。

鈴さんの命令で俺が焼き鳥を焼き、お酒を飲んだ。

「邪魔者が来たら困る」と今度の鈴さんは何のためらいもなく、さつさと入口の鍵を締めた。

それから鈴さんの川崎での暮らしぶりを聞き、俺の旅先での思い出話をして、大いに笑い盛り上がった。

「鈴さんて美人じゃないけれど、味わいのある顔立ちですね」

「何よそれ、嫌なやつだね」

「怒らないでくださいよ、俺には美人よりも味わいのある顔の方がランクは上です」

「そんなセリフ、世間じゃ通用しないわよ」

「そうですか、じゃあ鈴さんにだけ通用すれば良いですよ。鈴さんは美人よりも美しい」

不思議と酔わなかった。

傍目に見たらどう写るかは分からないが、こんな事も有るのかと思えた。

一事が万事、出会いの不満も今のこの満たされた気分も、こんなことが有るのかと思えた。

俺はただ父に手紙を投函して帰るだけの筈だった。

偶然と必然の距離なんて案外と近いのかも知れない。

腕時計を見ると午前零時を過ぎていた。

「鈴さん、俺はもう帰るよ」

鈴さんは俺を車で送って行くと言い張ったが、いくらでもお酒を飲んでしまっている。

歩いて帰ろうと入口の引き戸を開けて驚いた。雪が5〜60cmも積っていた。

その上、吹雪は続いていた。

わずか数百メートルのアパートまでかえるに帰れない状態に、何故か笑ってしまった。

「まったく、北海道は恐ろしいところですね」

「ここは神奈川県じゃないからね、世界は広いって事よ」

「でもさ、これじゃあかえるに帰れない。鈴さんは除雪車を持っていますか？」

「馬鹿だね、そんなもん持っている訳ないよ。いいから泊まっていきなよ。明日、除雪が済んだら帰りな」

悩むも何も他に方法が見当たらない。

お店の二階が鈴さんの居室になっていた。その二階への細い階段を上る。

寒い部屋の暖房を鈴さんが入れてくれた。

「布団は一組だからね、変な事をしたら表に叩き出すよ」と真剣とも笑顔とも言えぬ顔で言い渡された。

「鈴さんの名前って、良い名前ですね」

寝床を整える鈴さんにそう話しかけた。

「何よ、今さら急に」

「今さらって言われても、たった今そう思ったんです」

「お店の名前の鈴懸の枝も、良い名前だと思います」

「そうね、気に入っているわ。でも焼き鳥屋向きじゃないけれどね」

「でも、俺はその名前がこの店に入る気になったんです」

「どうして？」

「何て読んだら良いのか分からなくて、興味が湧いて」

「それだけで入って来たの？」

「そうですよ」

「あんたは、この吹雪の中をお店の名前だけで入って来たの」

「そうですよ、だから良い名前だと思います。お陰で鈴さんと出会えました。」

親父さんの話も凄い話しです。俺、話を聞いていて、さっき泣きそうになった」

「嘘ばかり」

「この店に入って、一度だって嘘はついていないですよ」

俺は真正面から鈴さんを見据えて目を逸らさなかった。

その目は鈴さんを睨んでいたかも知れない。

「分かったわ、信じる。ありがとう」

俺は上着のジャンパーだけ脱いで、鈴さんの方は見ないようにと壁

際の方を向いて、布団に包まった。

部屋の明かりが消されて、背中合わせに鈴さんの身体を感じた。

「あんだ寒くない？」

「背中合わせだと隙間風が入ります」

「じゃあ、どうすれば良い」

「俺が鈴さんの方を向きます。大丈夫です、叩き出されて凍死したくはありませんから」

俺はゆっくりと向きを変えて、鈴さんを後ろから抱くような形になった。

「これなら隙間風が入りません」

鈴さんは無言だった。

「鈴さん、人と人との出会いって不思議ですよ。俺は同じ誕生日の人と初めて会った。

鈴さんは俺とよく似た性分の人かもしれない、何となくそう思います。会えて良かったです。鈴懸の枝という店も、鈴さんのことも一生忘れられないでしょうね」

「うるさいから、黙って」

にべもなく黙らされた。

そのまま眠り込んでしまうのかと思ったら

「ねえ、おっぱいだけなら触っても良いよ」

驚きで声が出なかった。

「私だって今日の事は忘れない」

俺は恐る恐る鈴さんの胸を探した。

服の上から胸を触ろうとしたら、その手を掴まれて、鈴さんの胸に直接触れるように誘導された。

暖かな胸が手のひらにあった。

俺の口からは溜息とは違う、大きな息が漏れた。

「にぎって」

それからどれだけの時間が流れたか、眠りに入る直前にこんな声を

聞いた。

「鈴懸の鈴は見つかったよ」

それが鈴さんの声なのか、お父さんの声なのか、俺には分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5155p/>

鈴懸（すずかけ）の枝

2010年12月30日19時25分発行